

学校教育目標	幸せに生きる力を育む高須小教育～Zest for Life～ 校訓：自彊・至誠・夢～		
a ミッション	小中連携の推進による自立性・協働性の育成	a ビジョン	＝継承と創造＝ 「多様性」と「柔軟性」を基盤とした持続可能な教育の推進

評価計画					自己評価					学校関係者評価				改善計画
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値	h 達成度	i 評価		イ	ロ	ハ		
主体性・協働性・表現力の育成 幸せに生きる力の育成	○基礎的・基本的な知識・技能を獲得し、見方・考え方を働かせて考え、表現できる児童の育成	○基礎学力定着のための授業改善 ○見方・考え方を働かせて表現する授業の推進 ○学習意欲を高めるモジュール授業の実施	○標準学力調査（国語科・算数科の正答率） ○国語科及び算数科の単元末及び学期末テスト（国語科「知技」「思判表」算数科「知技」「思判表」）	全国平均以上 80%	国語知能 73.0% 国語思考 80.9%	国語 69.9% 算数 71.7%	国語 99.0 算数 102.8	A	標準学力調査では、全国平均以上の学年が、国語科は2学年、算数科は4学年だった。算数科は基礎的な部分が向上し、活用の面でも向上が見られる。国語科は、前年度とあまり変化が見られない。 単元末テストの結果では、国語科・算数科ともに、目標値を達成することができた。 国語科の単元末テストの結果からは、単元で学習する文章は読み込むため、達成率が高いが、初見の文章での置きが見られる。標準学力調査でも、話すこと・聞くことの領域や読むものの領域での課題が見られる。また、土台となる言語の力に課題がある。算数科では、図形やデータの活用の領域で課題が見られた。しかし、前年度の比較で見ると、算数科では、基礎・活用の領域ともに、向上が見られている。前年度から、見方・考え方を働かせるためのものをアイテムと設定し、カード化しながら授業で活用したことが、活きてきていると考えられる。図をかけるようにすること、また、モジュールでの繰り返しも効果的だった。	3			・繰り返し学習や読書を頑張っている。辞書に様々な表現や文章があるので活用してほしい。モジュールでの繰り返し学習はとても良いと思う。 ・話すことや聞くことは、これから大人になってとても大切な部分だと思うので、少しずつでも課題がクリアになればよいのではと思う。 ・学力調査に関しては、視点を少し変え、該当学年で全国平均以上の児童の%を一度聞いてみたいと思う。全体平均としてしまうと、一人が飛び抜けて良い悪いに影響を受けやすく、正しい数字と言われると「や」がつくと思われる。	国語科では、単元末テストの結果は良いことから、初見の文章が読み取りにくいことが考えられる。そのため、単元の教材だけでなく、宿題等で文章題に触れる機会を作っていく。また、聞き取り等はメモの取り方を知ること必要だと考えるため、3学期は聞き取りの練習を授業の中に取り入れている。 算数科では、図の定着と苦手な分野の繰り返しを行っている。標準学力調査の結果を分析し、苦手な部分を中心に補充を行うことで、学力の向上を図る。
	○集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度の育成	○児童会執行部や各委員会、当番や係活動を中心とした児童主体の活動の計画及び実施 ○児童の良いところ・良い行動への肯定的な評価	○児童アンケート「自分から進んで当番や係活動・委員会活動に取り組んでいる」（肯定的回答の割合） ○児童アンケート「自分にはよいところがある」（肯定的回答の割合）	85% 85%	88.4% 93.8%	91.4% 92.3%	107.5 108.8	A	児童アンケート「自分から進んで当番や係活動・委員会活動に取り組んでいる」の項目は目標値を達成することができた。各学年の実態に応じて、当番や係活動の評価の仕方を工夫していることや年間を通して各委員会が様々な取組を考え実施することができたことが数値に繋がっているのではないかと考える。また、2学期には児童会が主体となり、異学年交流の活動として「ふれあいウォークラリー」を実施することができた。 児童アンケート「自分にはよいところがある」の項目においても目標値を達成することができた。教職員から児童への肯定的な声掛けだけでなく、児童相互が認め合う場を繰り返すなど設定している学年もあった。3学期には、児童会が主体となり互いの良さを認め合う取組として「ありがとうの木」を実施した。また、児童の良い所を玄関に映し出している「高須小学校でさき発見」の取組も継続して実施することができたことも成果として挙げられる。どちらの項目も学年によって差があることから、取組を行う意義を児童に伝えていくことや、取組を行う際の教員の意識の統一を図っていくことが必要であると考えられる。 不登校児童への対応については、月に1度の不登校児童対応研修を通して、教員が児童へ関わり続けるという意識統一を図ることができた。結果、これまで全ての児童が高須小学校へ出席することができた。	3			・自己肯定感を高め、自信を持ち、一人一人の思いを認め合い、自分を大切に感じようとしている。地元を誇り続けられるよう高須小学校の児童達の仲間意識を向上させたい。不登校の児童への対応は全ての児童が出席できるようにしていきたいと思う。 ・2学期に行われた「ふれあいウォークラリー」はとてもいいことだと思う。同学年だけでなく、異学年との交流というところがとてもいいことだと思う。不登校児童への対応はとても慎重を要することだと思う。全ての児童が出席できたというのはとても素晴らしいことだと思う。 ・前回要望した校内的で「学年を超えたつながりの醸成」という部分を早速実施して下さりありがとうございます。今日の活動で見られる様々な自己肯定感に繋がる機会が今後の成長において子供たちにとって大いにプラスとなると思われる。不登校に関して、今年一度も不登校・登校できなかった児童数が0人という事で、これだけのマンモス校でこの数字を出したことは先生方のがんばりに感謝と言いたい。	児童の達成感や自己有用感を高めるためにも、当番や係活動の評価の仕方や委員会の取組の評価の仕方を工夫していく必要がある。委員会発表は5・6年生が自覚や責任をもち、下級生が上級生の真似をしようとする心高めるという意味でも引き続き行っていく。 縦のつながりを意識するために異学年交流の取組を行ったが、本取組だけでなく、継続的に行えるような他の取組を考え実施していく必要がある。 また、児童相互が認め合える場や取組を設定していくことや教職員からの肯定的な声掛けの意識は引き続き行っていく。取組の時だけでなく、普段の授業や生活の中で児童相互のつながり、肯定的な声掛けを行い、誰もが安心して過ごすことができれば素晴らしい。学校作りを目指していきたい。また学校だけでなく、家庭での会話が広がる「ふれあいBINGO」のような取組も継続的にしていきたい。 不登校児童への対応については、不登校児童対応研修を継続的にし、取組の共有や改善を行っていく。また、担任一人では抱えきれないように教員間、保護者、関係機関等と連携を取り、組織的な対応を意識していく。
	○友達と助け合い、励まし合いながら体力の向上を図るとともに、運動に親しむことのできる児童の育成	○「できる」「わかる」体育の授業の実現	○児童アンケート「体育の授業で、できるようになったことや分かるようになったことがあった」（肯定的回答の割合）	85% 85%	93.9% 94.6%	111.3	A	目標値85%を達成することができた。体育の授業でお手本の動画を活用しながら「できるポイント」を絞って提示し、自分の技と比べて何が違うのか意識して取り組んだり、記録を視覚化することで成果が目に見えやすかったり、できるようになった友達にプラスの声をかけたりしたこと等が児童のやる気に繋がり、達成できた要因と考えられる。 運動に苦手意識があり、できないことに対して直ぐに諦め、チャレンジ精神の弱い児童が多いことが課題である。	3			・毎日の生活（外遊び等）で体力をつけていることがほとんど進んでいる。達成感をたくさん経験している。 ・運動に苦手意識があるが、周りの子が達成をしてくれて一緒に頑張りたいと思う。何か少しでも「楽しいかも。」と思ったらあと一歩やってみようと思えるので、そのような取組ができたと思う。 ・「できる」という成功体験は、子供たちにとって何よりも大切な「自己肯定感」醸成のためのツールだと思う。これからの成長期に活用し成功体験を味わってほしい。	運動が苦手な子ども達も、できないからと直ぐに諦めないで挑戦してみようと思える体育の授業に取り組む。その具体的な改善案として、 ①引き続き「できる」「わかる」ようになるためのポイントを1つに絞って指導する。 ②自分ができるようになったことを、授業後にしっかりと振り返りをしていく。 ③運動が苦手な児童の保護者と連携し、チャレンジしてみようと思えるようなプラスの声かけをする。	
連携組織・協働・つなぐ関わり	○学校全体でベクトルを揃えた学校運営の実現	○主任・主事を中心とした組織としての目標設定及び方策の進捗管理の実施	○教職員アンケート「学年会で意識統一したことを徹底している」（肯定的回答の割合）（チェック項目3/4以上）	80% 80%	93.2% 97.7%	122	A	教職員アンケート肯定的回答の目標値を達成することができた。また、尾道市の「働き方改革アンケート」の「学校教育目標の達成に向けた取組に参画している」の項目において、本校教職員の肯定的回答が100%であった。毎月の方策進行管理シートの結果分析を経営会議、部長会、四部会、学年会、それぞれで行い、学校教育目標の実現に向けた重点取組について話し合い、全体で確認する場を設け、全教職員の意識統一に取り組んできた成果だと考えられる。しかし、若手教員や本校勤務年数が少ない教員の中には、「様々な業務の見通しをもつことが難しい。」や「業務に関する報告・連絡・相談が遅れてしまった。」等と、業務に関する不安を感じている者がいるという課題がみられた。	3			・PTAの取組と教職員の双方の気持ち合い方向に向いていると感じる。土台がしっかりしている児童を安心して育ち持たせる。これからは頑張りたい。 ・教職員の肯定的回答が100%は素晴らしいと思う。職員が同じ方向を向いて取組をしたら、若手もいろいろいることを経験し、不安を感じたらすぐ相談できる環境につながればと思う。 ・若手教員や本校勤務年数が少ない教員の課題については、個人のスキルの問題なのか環境面の問題なのか、課題解決の方向性を見失わないようフォローアップをお願しいたい。ベテラン教員や年長が「いつも正しい」という環境を常に保ち、働くことの生きがい・やりがいを持った職員が増えるようフォローをお願いしたい。先生の幸せな毎日は先生と接する子供たちに直結すると思う。	学校教育目標の達成に向けて、全教職員がベクトルを揃えて取組を進めていくために、引き続き、各部の主任主事を中心に、毎月の重点取組を話し合い、それらを全体で確認して全教職員の意識統一を行う。また、「見直しもでない。」「報告・連絡・相談・確認が遅れた。」という課題がみられたので、各部の主任主事がそれぞれ部の教職員に丁寧な指導助言を行っていく。さらに、若手教員等が業務に対して不安を感じないように、「学年委員会」を開いて、日々の取組の確認をしながら業務を進めていく。	

【自己評価 評価】

A：100≦（目標達成）

C：60≦（もう少し）<80

B：80≦（ほぼ達成）<100

D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。